

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。 解答番号は〔一〕の 1 から 13 までとする。

※ ラーゲリで命を落としたロシアの詩人オシップ・マンデリシュタムは、「対話者について」というエッセイにおいて、
 投壘通信の名宛人とはその壘を拾い上げた者だと述べている。

航海者は遭難の危機に臨んで、自分の名と自分の運命を記した手紙を瓶^{びん}に封じ込め海へ投じる。幾多の歳月を経て、砂浜をそぞろ歩いていて、わたしは砂に埋もれた瓶を見つけ、手紙を読んで遭難の日付けと遭難者の最後の意思を知る。わたしにはそうする権利がある。わたしは他人あての手紙を開封したりはしない。瓶に封じ込められた手紙は、瓶を見つけた者へあてて書かれているのだ。見つけたのは、わたしだ。つまり、このわたしこそ秘められた名宛人なのである。

難破しかけた船から海へと投げ込まれた壘は、砂浜でそれを拾い上げたひとを宛先としている。おそらく、投げたほうは拾った者のことを知らないだろうし、たまたま拾ったほうもなぜそれが私を名宛人としているのか明確に答えることはできないだろう。にもかかわらず、壘を拾った者はその手紙がほかならぬ私へと呼びかけていることを感じ取ってしまう。まさに私が読まなければならない手紙として壘は拾われるのである。とはいえ、このような事態は波打ち際を歩かなくとも多くのひとが経験していることだろう。詩や小説を読んだときに、それがまさに自分に宛てられていると思ってしまうとしたら、その言葉は私宛ての投壘通信にほかならない。自分の名は書かれていないにもかかわらず、まさに私へのシンテン^(a)であるかのように受け取れてしまう言葉がこの世界にはたしかに存在している。

投壘通信というモチーフが示すこのような事態を考えるための手がかりとしては、たとえば「偶然」、「出会い」、「出来事」、「特異性」などといった哲学の概念や、宗教が語る「選び」といった考え方が思い浮かぶかもしれない（これらは、いわば類型化や一般化を逃れるものを思考するための概念である）。しかし、ここで私は投壘通信における人称のあり方にこだわって

みたい。なぜある種の言葉はほかならぬ「私」を名宛人にしてしまうような力をもつのだろうか。マンデリシュタムは「私」という一人称から投壘通信を語ったが、このロシアの詩人を熱心に翻訳したパウ[※]ル・ツェランは、それとは反対に「あなた」という二人称から投壘通信を語っている。

② 詩は言葉の一形態であり、その本質上対話的なものである以上、いつの日にかはどこかの岸辺に——おそらくは心の

岸辺に——流れつくという（かならずしもいつも期待にみちてはいない）信念の下に投げこまれる投壘通信のようなものかもしれません。詩は、このような意味でも、トジョウにあるものです——何かをめざすものです。

何をめざすのでしょうか？ 何かひらかれているもの、獲得可能なもの、おそらくは語りかけることのできる「あなた」、語りかけることのできる現実をめざしているのです。

そのような現実こそが詩の関心事、とわたしは思います。

③ 壘を海へ投げるとき、投げ手はその手紙がどこかのあなたへと届くことを信じている。投げ手の心のなかには届いてほしい

具体的な誰かがいるかもしれないが、実際にそのひとへと届く確率はゼロに近いだろう。それでも遭難した船から壘が海へと投じられるのは、その手紙を誰かが拾ってくれるという「信念」が投げ手にあるからだ。その誰かを、ツェランは鉤括弧を付

④ かきかつこ

して「あなた」と述べる。海に投げ込まれた手紙の宛先は、誰でもよい誰かではなく、「あなた」という二人称関係のなかにあるひとなのである。しかし当然のことながら、たまたまどこかの岸辺に漂着した壘を拾い上げたひとがその「あなた」である以上、壘を投げた当人はそのひとを知るすべをもたないし、手紙が運よく届いたときにはすでにこの世にはいないかもしれない。それゆえ、ツェランが語ろうとしている「あなた」とは、いわば対面関係にないような二人称なのだ。同じ時間と空間を共有することなく、投げ手と受け手のあいだにあらんかぎり隔たりが開かれつつも、それでもなお成立しうるような二人称関係。それこそツェランがわざわざ鉤括弧を付して語っている「あなた」なのである。この「あなた」とは、誰なの

かすぐには知りえないけれども、どこかにいるあなた、その意味で「誰でもよいあなた」なのだといってもよいだろう。壇の投げ手はそれを受け取るひとを知らないがゆえに、この「あなた」には誰でもよいという不定性が不可分なたちで結びついている。ここで問われている二人称とは、あえて耳慣れない言葉を用いるならば不定の二人称なのである。

このような「誰でもよいあなた」は、いうまでもなく「誰でもかまわないあなた」ではないし、「誰でもよい誰か」と混同されてもならない。^⑥投壘通信は「誰でもよい誰か」へと向けて投げられるのではなく、「誰でもよいあなた」へと宛てられている。いわばそれは、均された「ひと」へと向かうことをダンコとして拒み、^⑦平均値を逸脱する「あなた」を切実に求める言葉である。まったく不定性ではなく、不定性に二人称という限定が加わることによって、言葉は切迫感を帯び、ツェランが語るようにそこに投げ手の「信」が宿るのだ。そのような言葉であればこそ、漂着した壘を拾い上げたひとは、それをほかならぬ「私」宛ての手紙として読むことができるのだろう。しかし、そもそも「誰でもよい誰か」に宛てられた言葉と、「誰でもよいあなた」に宛てられた言葉を分けることはできるのだろうか。両者を分けるシヒョウなどあるのだろうか。ここで思い出さなければならないのは、詩人たちによる「投壘通信」というモチーフを探究する細見和之の次のような指摘だろう。

ともあれ、詩をあくまで「対話」、「あなた」への語りかけと呼ぶ、さきに引いたブレーメン文学受賞講演におけるツェランの語り方は、私たちにも非常に馴染みやすいものだろう。しかし、そう語りながらツェランが実際に綴っていたのがまさしくあの「エングフールング」のような作品だったということを、私たちは重ねて考えなければならない。

「あなた」への語りかけとしての詩という、ある意味ではわかりやすく明快なツェランの議論とは裏腹に、ツェラン自身の詩がきわめて難解であるという事実をどのように考えればよいのか。現代の詩や小説や哲学はとかく「難解」という言葉で形容されやすく、そのように語ること自体は容易だが（難解さしか手がかりがないので仕方がないともいえる）、しかし「難解」という言葉から一歩踏み込んでテクストを読み解こうとするとたちまちそこには高い壁が聳え立っている。^⑧ツェランの詩もま

たそのような性質のテキストである。それではいったいなぜ、ツエランは「あなた」へと言葉が届く「信」を語りながら、かくもひとを拒むような詩を書いたのだろうか。この点について、細見は『投壘通信』の詩人たちに先立つ著作で、すでに次のような説明を与えていた。

いわば内的にフウイン^eされたツエラーンの詩、それは読者を徹底的に「選ぶ」のだ。ツエラーンがさまざまな詩のなかで用いている「あなた」が何を指しているのか、「神」なのか、亡き母なのか、その都度いろいろと議論することが可能だ。しかし少なくとも、ツエラーンが詩『投壘通信』の宛先に想定している「あなた」とは、このようなきわめて限定された「読者」とまず考えることができるだろう。

ここで述べられている「選ぶ」とは、「誰でもよい誰か」と「誰でもよいあなた」を分けるポイントだろう。読者を「選ぶ」詩であればこそ、その詩は「あなた」という限定された二人称へと語りかけることができる。それゆえ、ツエラーンの詩の難解さとは、「誰でもよい誰か」ではなく「誰でもよいあなた」へと言葉が宛てられるための条件とさえいえるかもしれない。誰とでも同じ関係を結ぶのではなく、「あなた」という限定された二人称と特別な関係を結ぶことができる言葉とは、誰にでも同じ意味を伝える情報のような言葉ではなく、「あなた」ととって一般化しえない意味を生み出す言葉なのである。そのような言葉が、ツエランにおいては難解さというかたちで表れているのだ。

（伊藤潤一郎『誰でもよいあなた』へ——『投壘通信』による）

※ラーゲリ……戦争捕虜・政治犯などの強制収容所。一九二〇年代末からソ連で人民抑圧の機構となった

※オシップ・マンデリシュタム……ロシアのユダヤ系詩人。スターリンの粛清によって逮捕、流刑。シベリアの収容所で死去した

※パウル・ツェラン……本文中では「ツェラーン」とも表記。ドイツ系ユダヤ人の詩人。両親が強制収容所で死去、自身も労働収容所へ送られる。作品に「エングフュールング」（本文にある）など

問一 二重傍線部①～⑥の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

- 1
- ① 1 未来へのテンボウ
2 創立記念シキテン

- 2
- ② 3 ファイルをテンブする
4 テンキョ通知
1 本心をトロする
2 宗教のシント

- 3
- ③ 3 ゼント多難
4 権利をジョウトする
1 テンコを取る
2 コユウ名詞
3 コイか過失か
4 コモン弁護士

- 4
- ④ 1 テイヒヨウのある店
2 デンピヨウを切る
3 ヒヨウメンセキ
4 昆虫のヒヨウホン

- 5
- ⑤ 1 条約にチヨウインする
2 巻末のサクイン
3 インガ関係
4 詩のインリツ

問二 傍線部①の理由として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 6
- 1 手紙の投じ手と受け手の間に「二人称」の関係が生じるから

- 2
- 偶然ではあれ拾った者には拾ったことへの責任が生じるから

- 3
- 船が難破しかけていた以上遭難者のSOSかもしれないから

- 4
- 壇を拾った者が手紙の宛先だというのが投壇通信の掟だから

問三 傍線部②といわれるのは詩のどのような側面についてか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 詩は一見一方通行の言葉だが、その実受け手からの「返信」を願って投じられるものだという側面
- 2 詩は投壘通信のような言葉である以上、特定の「あなた」をめがけて発信されるものだという側面
- 3 詩は誰とでも同じ関係ではなく、言葉の受け手との一般化し得ない関係を目指すものだという側面
- 4 詩はたとえ一人称で書かれていても、二人称の語り手の言葉として理解され得るものだという側面

問四 傍線部③はなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

- 1 投げ手の中では届いてほしい相手が具体的に想定されている行為だから
- 2 壘を投げるという行為は誰かが拾ってくれるという信念と不可分だから
- 3 手紙は、届けようとする相手のことを想像しながら書かれる言葉だから
- 4 海へ投げられた壘は誰かに対する通信だという文化が根付いているから

問五 傍線部④について、「鉤括弧」が付けられている理由として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

9

- 1 具体的な「あなた」ではなく、抽象的な対象物全般を指すから
- 2 名前を知る「あなた」ではなく、見知らぬ一般読者を指すから
- 3 一人の「あなた」ではなく、不特定多数の集団全体を指すから
- 4 目の前の「あなた」ではなく、時間や空間を隔てる人を指すから

問六 傍線部⑤において、「誰でもかまわない」ことが否定される理由として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

10

- 1 「誰でもかまわない」だと、「あなた」という限定が無化され、完全な不定性にさらされてしまうから
- 2 「誰でもかまわない」だと、言葉の送り手がなぜやりでいい加減な印象を受け手に与えてしまうから
- 3 「誰でもかまわない」だと、「かまわない」という否定が、誰でも「よい」という肯定と矛盾してしまうから
- 4 「誰でもかまわない」だと、誰かが拾ってくれるはずだという「信」が失われニヒリズムに陥るから

問七 傍線部⑥とはどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

11

- 1 投壘通信は、世間一般の平均値としての「ひと」ではなく、平均的とは思えない特殊な「あなた」に向けられているということ
- 2 投壘通信は、事前には不定性にさらされているが、事後的に特定の受け手に向けられていたことが分かる言葉であるということ
- 3 投壘通信は、「誰でもよい」不定の者に向けられているが、受け取った者にとっては唯一無二の者である証となるということ
- 4 投壘通信は、平均的で抽象的な「ひと」ではなく、不定ではあるものの、あくまで「あなた」へと向けられているということ

問八 傍線部⑦の疑問への解答として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

12

1 均された「ひと」に届くのを拒絶することで言葉が切迫感を帯びることが、言葉を対話的にし詩への「信」を支えるから

2 誰にでも理解できる平易な言葉は情報伝達的手段と化してしまい、正確に伝わるかどうかだけが問われることになるから

3 誰かへと届く「信」をもちながらも、どこかでその確信に対して半信半疑のまま書き読まれるのが詩だと考えていたから

4 読者を「選ぶ」ような難解な詩こそが、実際に受け取った者に「選ばれし者」という自尊心を与える言葉となり得るから

問九 本文の主張として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

13

1 マンデリシュタムとツェランはともに詩を「投擲通信」に準えたが、それぞれ一人称と二人称で捉えその主張は正反対である

2 詩を読み「これは自分に宛てられた言葉だ」と思えるのは日頃から詩を読み慣れた読者だけで、それには読書量が必要である

3 現代の詩や小説の「難解」さは単純に否定されるものでなく、投擲通信の原理を追求していった時に避けられないものである

4 詩の言葉を「投擲通信」として語るためには、詩人自身が死の危険に直面した経験をくぐり抜けてきていることが重要である

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。 解答番号は〔二〕の 1 から 8 までとする。

うちとくまじきもの

えせ者。さるは、「よし」と人に言はるる人よりも、うらなくぞ 1。

船の路。日のいとうらかなるに、海の面おもてのいみじうのどかに、浅緑の打ちたるを引き渡したるやうにて、いささかおそろしきけしきもなきに、若き女などの相袴※あこめはかまなど着たる、侍さむらいの者の若やかなるなど、櫓※ろといふ物押して歌をいみじう歌ひたるは、いとをかしう、やむごとなき人などにも見せたてまつらまほしう思ひ行くに、風いたう吹き、海の面ただあしにあしうなるに、物もおほえず。泊るべき所に漕ぎ着くるほどに船に浪のかけたるさまなど、かた時に、さばかりなごかりつる海とも見えずかし。

思へば船に乗りてありく人ばかり、あさましうゆゆしき物こそなければ。よろしき深さなどにてだに、さるはかなき物に乗りて漕ぎ出づべきにもあらぬや。まいて、底※ちひらひも知らず、千尋※ちひらなどあらむよ。物をいとおほく積み入れたれば、水際※みぎははただ一尺ばかりだになきに、下衆げすどものいささかおそろしと思はで走りありき、つゆ悪あしうもせば沈みやせむと思ふを、大きな松の木などの二、三尺にてまるなる、五つ六つほうほうと投げ入れなどするこそいみじけれ。

※屋形といふ物の方にて押す。されど、奥なるはたのもし。端はたにて立てる者こそ、目くるる心地すれ。早緒※とつけて、櫓とかにすげたる物の弱げさよ。かれが絶えば何にかならむ。ふと落ち入りなむを、それだに太くなどもあらず。

わが乗りたるは、清げにつくり、妻戸あけ、格子上げなどして、さ水と等しう下りおげになどあらねば、ただ家の小さきにてあり。

小舟を見やるこそ、いみじけれ。遠きはまことに、笹⑤の葉を作りてうち散らしたるにこそいとよう似たれ。泊りたる所にて、舟ごとにともしたる火は、またいとをかしう見ゆ。

はし舟とつけて、いみじう小さき⑥に乗りて漕ぎありく、つとめてなど、いとあはれなり。あとの白浪は、まことにこそ消え

もて行け。よろしき人は、なほ乗りてありくまじき事とこそおぼゆれ。徒歩路^{かちち}もまたおそろしかなれど、それはいかにもいかにも地に着きたれば、いとたのもし。

(清少納言『枕草子』による)

※裯……上着と肌着の間に着用した主に女性が着用した中着

※櫓……船を漕ぎ進める道具

※千尋……長さの単位で一尋は一・八メートルだが、ここは海の深さを誇張した表現

※一尺……長さの単位で三〇センチメートル

※屋形……船の上に設けた屋根のある家の形をしたもの

※早緒……船と櫓とを結び付ける麻綱

問一 空欄 1 にあてはまる言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 見ゆ 2 見ゆる 3 見ゆれ 4 見えよ

問二 傍線部①の現代語訳として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 2 1 うち捨てておかれない人などでもお見せして配慮してもらいたいと思っている

2 うち捨てておかれない人などでも見せていただいて配慮したいと思っている

3 地位や家柄が第一流である人などにもお見せ申し上げたく思っている

4 地位や家柄が第一流である人などにも見せて喜ばせたいと思っている

問三 傍線部②の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

3

- 1 風が強く吹いて海面が激しく荒れて生きた心地もしない
- 2 海面が荒れてはいるけれども特に恐れるまでもない
- 3 海面はとてもおだやかだがなにか恐ろしい様子を感じた
- 4 日がともうららかで海面がたいそうおだやかだった

問四 傍線部③の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

4

- 1 並みの深さなどでさえも、そうした頼りない船に乗って出発できるものでもないことよ
- 2 並みの深さでありさえすれば、頼りない漕ぎ手であっても出発できるのではないだろうか
- 3 かなりの深さだったとしても、そうしたはかないさだめに従って出発するしかないことだよ
- 4 かなりの深さだというのに、そんな頼りない船や人に頼って出発する気になれるだろうか

問五 傍線部④の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

5

- 1 屋形が壊れてしまったらこの旅はどうなってしまうだろう
- 2 端に立っている者がいたとして何の役に立つというのだろうか
- 3 早緒と共に櫓につないだ物が失われたら何を代わりにできるだろう
- 4 早緒と呼ばれているものが切れたとしたらどうなってしまうだろう

問六 傍線部⑤の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

- 1 船から見える小さい家々を、笹の葉で編んだ家を雑然と並べた様にたえている
- 2 筆者の乗ったこぎれいな船が、笹の葉をちりばめたような内装であることをたたえている
- 3 遠くに見える小船を、笹の葉で折って作った船をたくさん水に放した様にたえている
- 4 長い船旅でやることもなく退屈なので、笹の葉を海にたくさん流す遊びに興じている

問七 傍線部⑥の現代語訳として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 非常に小さい船に乗って漕ぎ回る、早朝など、とてもしみじみとする
- 2 船の端の非常に狭いところを歩き回ると、翌朝などは、とても辛くなる
- 3 非常に小さい人までも漕ぎ手にされ、一生懸命で、とてもかわいそうになる
- 4 船乗りが非常に小さい声で、おつとめをしているのが、とてもありがたいと感じる

問八 傍線部⑦の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

- 1 船での旅行は波が荒れたりすると出発できないが、徒歩の旅行は歩いていけば必ず着くから
- 2 徒歩の旅行にも危険はあるが、船底一枚の下が水の船旅よりも地面があるだけまだ安心だから
- 3 徒歩の旅行は自分で歩かなければならないが、船旅は船に乗っているだけで着くので安楽だから
- 4 身分のある人は地上の旅行でも乗り物を使うので、船に乗る旅と実際は変わるところがないから

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。 解答番号は〔三〕の 1 から 8 までとする。

近年、「親ガチャ」という言葉をよく耳にするようになった。子どもは親を選べず、人生は運次第というわけである。そこで目が向けられているのは、これからの時間ではなく、これまでの時間である。ガチャで何が出てくるかは、くじを引いた時点ですでに決まっている。それと同様に、これからの人生がどうなるかも、出生時の諸条件であらかじめ定まっている。したがって正確には、人生は「出生時の」運次第なのである。

すごろくゲームのような運不運に左右されるものとして人生を捉えることは従来からあった。しかし親ガチャでは、これから振るサイコロの目によって順位が決まるわけではない。そもそもスタート地点が大きく異なっており、これからどんなサイコロの目が出たとしても順位は変わらない。しかも、ガチャは工夫次第でリセマラ（リセットマラソン。ソーシャルゲームで目当てのアイテムを入手するまで何度もしリセットすること）ができるし、すごろくゲームもやり直しできるが、親ガチャを引けるのは生涯で一度きり（いや、それすらも自分では引いていない！）で再チャレンジはできない。

「親ガチャ」が表わすのは、様々な偶然の結果の積み重ねではなく、出生時の諸条件に規定された必然の帰結として自らの人生を捉える、宿命論的な人生観である。親ガチャにおいて偶然に依拠しているのは、出生時の諸条件だけである。以後の人生は、すべてそれに規定されている。このような決定論的な人生観が高原社会に登場したのは、[※] けっして偶然ではない。それは、今日の時代精神がもたらした必然の産物である。

生活水準においても、学歴においても、親世代のレベルを上回ることを容易に実感しえた右肩上がりの時代はすでに終わっている。ほぼ平坦な道りが続く高原社会に生まれ育った現在の若年層にとって、これから克服していくべき高い目標を掲げ、輝かしい未来の実現へ向けて日々努力しつつ現在を生きることなど、全く現実味のない人生観に思えてもおかしくはないだろう。

かつての若者たちが、見上げるように急な坂道を上り続けることができたのは、現在の若者たちより努力家だったからでは

ない。後ろから強い追い風が吹き上げていたからである。社会全体が底上げされ続けていたからである。しかし今日では、努力の②コストパフォーマンスは大幅に低下しているのである。

それだけではない。経済格差が拡大し、さらに世代間連鎖によって固定化しつつある現実も、今日の人生観に決定論的な趣を与えている。経済格差の拡大が学力格差の拡大を招き、それが格差の固定化を助長していることは、すでによく知られた事実だろう。子どもの教育にかけられる時間や費用は、家庭の経済状況によって大きく異なるからである。しかし、それだけの理由ではない。じつは関係格差もまた、学力格差に影響を及ぼしている。

たとえば近年は、学習中に質問したい箇所をすぐにSNS等で相談できる仲間が身近にいるかどうか、学習の効率や意欲を左右する大きな要因となっている。ネットというコミュニケーション・ツールが普及したからだけではなく、先述したように、そもそも今日では友人関係の重要度がかつて以上に高まっているからである。そして、このような友人関係もまた、家庭の経済状況の影響を大きく受けている。

たとえば、試合の遠征費やユニフォーム代が負担となる家庭の子どもは、部活動への参加をためらうだろう。遊興施設へ出て向いて遊ぶには小遣いの足りない子どもは、放課後の遊び仲間に加わることをためらうだろう。いちいち誘いを断らねばならない友人を作るより、いっそのこと孤立を選んだほうが、自尊心を傷つけられずにすむからである。

このような点に留意するなら、^③経済的に苦しいために進学や通学を断念せねばならない生徒に対して奨学金の支給を充実させるだけでは、格差の是正策として不十分だといえる。この支援によって救われるのは、進学や通学の意志があるのに、経済的な理由でそれが困難な者だけである。その意志をもっていない者は、そもそも奨学金の支給対象にならない。

私たちは、自分の人生に価値があると思えるとき、自分の将来に期待をかけてもいいと思えるとき、確かにコストパフォーマンスが悪くなっているものの、それでも努力を続けてみようと思うことができる。そして、見知らぬ世界について考えてみたり、新しい刺激に触れてみたりする機会を与えてくれる最大の存在は、教員でも親でもなく、まずもって友人である。それも、できれば自分とは生活環境の異なった友人との語り合いである。その体験こそが、未知の世界へチャレンジしてみよう

という意欲をかき立ててくれる。

私たちの意欲は、人間関係のなかで育まれる面が大きい。^④ 家庭の経済状況が関係格差を拡大させ、その関係格差が意欲格差を媒介に学力格差も拡大させていくとすれば、この世代間連鎖を断ち切るために必要なのは、奨学金のように使途が限定された支援だけではない。つながりの構築にも回せるような生活全般を包括する経済的支援こそが重要である。

親ガチャには、成育家庭の経済状況だけでなく、頭や容姿のよしあし、対人能力の有無なども含まれている。それらを親からの遺伝や、幼少期からの環境で決まる資質や才能と捉え、自分の人生を規定する大きな要因と考えるようになっていく。今日の宿命論的な人生観には、このような生得要因によって自分の人生が規定されるという見方も含まれている。

これまで私たちは、自らの努力で獲得した能力を重視する社会を築こうとしてきた。学歴を含めた各種の資格が評価されてきたのも、その能力を証明するものだったからである。しかし、

5

からの解放は、いったい自分は何者なのかという不安をかき立てることにもなった。とくに昨今では、社会的評価の基準も容易に移ろいやすく、現在の評価が5年後、10年後も続くとは思えなくなっている。自分の安定した尺度とはみなされにくくなっているのである。

だとすれば、変化しようのない生得的な資質や属性に重きを置き、そこに自分の人生の抛り所を見出そうとしても不思議ではない。それは、自らのアイデンティティの揺らぎを抑え込みたいという潜在的な願望の表われともいえる。生得的とみなされる属性は、変化が困難で固定性が強いがゆえに、見方によっては安定したアイデンティティの基盤になりうるとも感じられるからである。

人間関係の内閉化もそれに拍車をかけている。異なった生活環境にある人と自分を比較することが難しくなっていくからである。そんな心性が広がるなかで、社会的孤立に陥った人たちも、それを自身の至らなさゆえと捉えたり、自らの宿命と考えたりしがちになっている。^⑤ そもそも多様な他者と関係を築く機会がこの社会から消失しつつあることの結果としての社会的孤立であると自覚することは、その環境下ではきわめて難しいに違いない。

先ほど触れたギブソンの詩には、こんな一節もある。"look at the leaves / how they circle in the dry fountain (落ち葉を

見よ。涸れた噴水の中で回り続ける様を)。干上がった噴水の底に溜まった落ち葉は、秋風に吹かれてもその器の内側をくるくると舞うばかりで、外側へ飛び出していこうとしない。これはまさに内閉化した人間関係の警句ではないだろうか。他者の排除を狙った意図的な攻撃ではなく、関係の内閉化による無関心の広がりこそが、今日の社会的孤立の背景要因となっている。

これは社会的孤立に限った問題ではない。私たちは自分のことをわりと知らないものである。鏡に映して自分の顔を確認するように、他者から想定外の反応を受けることで意外な自分の姿を知ることが多々ある。だとしたら、異質な他者との出会いのなかにこそ、それも意図しない偶然の出会いのなかにこそ、自分の知らない自分と出会える機会がある。思いもしなかった自分の潜在的な可能性に気づかされる機会がある。

(土井隆義「平坦な戦場で僕らが生き延びること 社会的孤立と関係格差の最前線」による。ただし、見出しを省略した)

※高原社会……筆者の土井は、名目GDPが右肩上がりから横ばいに転じ、人びとの価値観も多様化した1990年代以降の日本社会を「坂道をひたすら上り続けた時代から、平坦な高原を歩き始める時代へと」移行した「高原社会」と定義している。

問一 傍線部①はどうか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1

1 自らの人生を出生時の諸条件がもたらした帰結と捉え、自らの努力などによって人生を変えられる可能性を認めないこと

2 自らの今までの人生を運がもたらした帰結であると捉え、今後の人生も運次第でどのようにでも変わると強く信じ込むこと

3 人生の良し悪しを親の能力や財力によって決定されるものと捉え、親が自分を産むまでにおくった人生の時間に目を向けること

4 人生を様々な偶然の結果の積み重ねとして捉え、今までの人生で生じた運不運によって今後の人生も規定されていると信じ込むこと

問二 傍線部②の説明として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

2

1 努力を続けることの社会的リスクが大きくなった

2 いくら努力をしても望んだ未来の実現が難しくなった

3 個人が努力をしても社会全体を底上げできなくなった

4 努力しつつ現在を生きる人生観に現実味がなくなった

問三 傍線部③はどうか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

3

- 1 進学の意志をもっていない者に対しても、進学希望者と全く同じ経済的支援を行うべきということ
- 2 関係格差解消のため、子どもたちのSNS利用や部活動への加入を促進すべきということ
- 3 子どもの自尊心を傷つけないため、放課後に遊興施設で遊ぶお金を支援すべきということ
- 4 学費の援助のみならず、使途が限定されない包括的な経済的支援が必要だということ

問四 傍線部④の具体例として適切でないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

4

- 1 裕福な家の生徒がお金をかけて進学塾に通うと、勉強を助けてくれる友人に恵まれ、勉強量や学力の向上に繋がります

- 2 経済的に貧しい家庭で育ち、両親や友人にも大卒者や大学進学希望者がいない生徒は、勉強して大学に行くメリットを実感しづらい

- 3 出身家庭が裕福であると、学習意欲がそもそも高く、他人の助けを借りずとも大学に合格できるため大学以降の学問に意欲を持ちやすい

- 4 友人との交際費を確保できない生徒は学校での交友関係が狭くなりがちで、その結果勉強のやる気や効率にも悪影響が出ることがある

問五 空欄 5 に入る言葉として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

5

- 1 貧困
- 2 しがらみ
- 3 人種差別
- 4 出自

問六 傍線部⑤はどうか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

- 1 異質な他者との出会いを契機として未知の世界への意欲を持った経験がない者には、人間関係の内閉化がいかなる弊害をもたらすか理解できないということ
- 2 社会的孤立を自らの宿命として受容している者は、多様な他者と関係を築く機会が消失しつつある今の社会をも積極的に肯定してしまうということ
- 3 社会的孤立を自らの至らなさゆえと捉える者は、その状況を生得的なものと考えることで自身のアイデンティティの揺らぎを抑えているということ
- 4 他者の排除を狙った意図的な攻撃を受けていない者は、社会的孤立の状況に置かれている時も、そのことに不安や不満を感じないということ

問七

空欄

7

に入る言葉として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 結果
- 2 正反対
- 3 隠喩
- 4 解決策

(問八は次ページにあります)

問八 本文の主張に合致しないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 現代の日本では出生時の諸条件によって人生が規定されているので、もっと各人の努力によって人生を変えられる社会にすべきである
- 2 若者が自らの可能性に賭けて努力することの見返りを実感しやすくなるように、行政は奨学金以外にも様々な支援を行うべきである
- 3 経済格差、学力格差、関係格差はそれぞれ独立したのではなく、相互に影響を及ぼし合いながら格差の固定化を助長している
- 4 異質な他者との出会いは、未知の世界に触れるチャンスであると同時に、自分自身の新たな可能性を発見する機会にもなる

(以下 余 白)